

# 重点活動課題

## あんずのブランド化等による「日本一のあんず産地の再構築」

### ■活動の背景とねらい

標記については、センターの普及活動計画の重点課題として令和元年度から取り組んでおり今年是最終年度であった。

具体的な活動の背景とねらいについては、重複するので一昨年のもを確認していただき、ここでは割愛する。

### ■取組と成果

令和3年度は昨年度に引き続き、コロナウイルス感染症の発生拡大で思うような活動ができなかった。

また、昨年に引き続き凍霜害による減収で、JA取扱量は平年の7割程で、減収になるなど量の確保が難しかった。

#### 1 ブランド化への取組（販売促進）

##### (1) 杏月を核とした生食用あんずの求評活動

協議会は、重さ120g以上で、かつ糖度が12度以上のものは、ハーコット全体の4%程の希少さで、それを逆手にとってブランド化へ仕向けた。

令和元年6月に「杏月（きょうづき）」として、大々的に披露し、マスコミ等にも取り上げられ注目を浴びた。

令和2年度は、凍霜害により水をさされたが、令和3年度は令和元年度の1.5倍の販売量となった。

コロナまん延防止のため、リモートによるトップセールス等の販売促進活動など、コロナ流行により活動に制約は受けたが、そのような中ではあったが、事業の継続性を重視し、銀座NAGANOでの直売イベントや新宿高野での生食あんずのPRイベントは現地スタッフに依頼し実施された。

一方で、銀座NAGANOではあんずがいつ入荷するのかという問い合わせが増え、杏月を前年に購入し、気に入ってくれた証しで認知度が少しずつではあるが広がっていることを感じることができ、ハーコットだけでなく、生食用あんずの認知度も高まっており、生産量が少ないこともあるが、活動を始めてからあんずの平均単価が上昇している。

##### (2) 輸送による品質低下等の対策

令和元年度に特殊フィルム（住友ベークライト株式会社製のMA包材の商品名pプラス）の効果を確認し、令和3年度も令和2年度に引き続き、pプラスで包装した状態で出荷が行われた。現在の化粧箱が終わり、現在のものが中身を確認しづらいという意見もあり、令和4年度に向け、JAで中の確認しやすい資材を検討していく。

##### (3) 裂果対策

果実肥大に伴う裂果対策として、雨水の果面吸収による影響を確認するため、収穫10日前に桃用の二重袋を被覆し、裂果防止効果の確認を行った。

##### 【結果】

袋の有無で果実の裂果発生程度に差はなく、ハーコットの裂果は果実表面からの吸水によるものではないと考えられた。また、裂果と果実径の関係は判然としなかった。

次年度以降も収穫直前の降雨による裂果対策について検討を行っていく。

##### (4) 凍霜害対策

ここ2年間は地球温暖化等の影響もあり、暖冬となり果樹等では生育の前進が顕著であった。令和2年は史上最も早い3月19日に開花し、その後に寒の戻りに遭い、訪花昆虫が飛ばない等により受精不稔等を招き、大幅な減収となった。

そこで令和2年4月、令和3年2月の2回、JA、市等と連携し、凍霜害対策講習会を2会場で開催し、100名程度の参加があるなど予想を上回る関心があった。



写真 ペール缶による簡易燃焼法の実演

内容は、気象の経過と予報、市販の燃焼資材やペール缶を利用した簡易燃焼法を周知するとともに、燃焼のデモを行った。また、メーカーも出席し資材のPRを行った。

支援センターは、農家が実際に行った凍霜害対策について聞き取り調査を行い、その結果について報告を行った。危険時間帯よりも早めの焚きだしや資材の設置数に留意が必要なることを伝えた。

令和3年度も暖冬の影響で3月21日と開花が早まり、4月中旬の低温により凍霜害が発生し、平年の7割程度の生産量となったが、ハーコットを中心に燃焼法による凍霜害対策が行われ、ハーコットで前年比398%、杏月で前年比725%の生産量が確保できた。

また、令和3年12月に行われた講習会では霜よけオイルヒーターのデモが行われ、注目を集めた。



写真 霜よけオイルヒーターの説明

凍霜害対策は防霜ファンか燃焼法の直接的な対処しか対応策がないのが実情である。兼業農家等では敬遠されがちであるが、凍霜害はこれから毎年あるものとして対応していかなければならない。

#### (5) 「ハーコット」収穫適期指標(陰光面果皮色画像見本)の作成

果樹試験場、JA、先進篤農家と検討しながら作成した「ハーコット」収穫適期指標の実証を行った。

陰光面果皮色指数(1:未熟、2:適熟直前、3:適熟、4:過熟)(以下Cc値)では適熟に近づくにつれ、酸度が低くなり食味が向上した。また、硬度が低くなり熟度が高くなった。

流通を考えると、Cc値2~3の範囲に入るものが出荷に適すると考えられ、「杏月」とし

て出荷された果実50果を調査したところ、全果実がCc値2または3であった。

最終調整を行い、2022年版ハーコット収穫適期指標として印刷したものをあんず部会員に配布予定となっている。



写真 完成した収穫適期指標

#### (6) 森地区で若木の凍害枯死対策

平成30年より11月、2月に株緩め処理(バックホーで樹体を持ち上げ断根処理)を毎年行ってきた。

- ・処理により対照と比べ、葉の大きさ、葉色等樹勢が弱まる傾向がみられた。
- ・現在までのところ凍害枯死状況は確認されていない。
- ・今年はおひさまコットが初収穫となった。今後も凍害枯死防止効果について検証していく。

#### (7) 森地区で高木化した樹の切り詰め(カットバック)による作業性(安全性)等の向上

・平成30年11月、令和元年8月に処理を行い、3年目の令和3年度は収量が60%弱まで回復し、収穫作業時間に占める脚立作業の割合は慣行区が67%に対し、カットバック区は44%となっている。今後は処理後の仕立て方等について関係者で協議しながら検討していく。

(中山間地農業ルネッサンス推進事業を活用)  
(地域第二係 柳澤)